

10. 災害と病

2025.11.27.大橋 幸泰

はじめに

本日の対象／「12 近世の大火・水害・地震」、「17 医療をめぐる社会と文化」
→近世の災害と病／非人為的動向による人類の歴史への影響を考える

1. 渡辺浩一「12近世の大火・水害・地震」

(1)近世の災害を考えるために

災害を考える際の注意点

- a.災害を引き起こす自然を脅威としてのみ捉えない／自然克服史観は人類による地球環境の悪化を肯定
- b.「復興」の語への注意／自然克服パラダイムを無意識に前提とする

災害を考える際の前提条件

- ①日本列島の自然条件／地球規模で見ると、自然災害の多い条件を整えている
- ②近世が生み出した社会構造／近世都市の叢生が自然現象を災害に誘導した

(2)被害の様相

大火／江戸は何度も大火を経験

水害／都市の利便性を高める自然改造が災害を誘導

地震／地震後、堰止湖の形成と決壊など、別の要素による被害あり

(3)災害対応

災害直後の政策的対応／施行(炊き出し)、御救小屋(一時避難所)、御救米(窮民救済)、の三点セット

→町共同体に依拠して被災者へ配分する救済から、町奉行所による生活困窮者を特定した支給へ

→寛政改革における江戸町会所設置／三点セットが機能

* 地域有力者による救済事業／社会的役割として期待される

(4)連続複合災害と政治

同種・異種の災害が続けて起きる「連続」と、自然現象が次の自然現象による被害を誘発する「複合」

→連続複合災害という視点／社会への影響を考える上で有効

*たとえば、天明飢饉後の寛政改革／①七分金積立の開始と町会所の設置、②災害対応決定過程の合理化

→天明期連続複合災害は、救済の仕組みや行政組織を変えた

2. 海原亮「17医療をめぐる社会と文化」

(1)近世の医者と医学

近世の医者／中国医学の修得／儒学の素養が必要／四書五経、陰陽五行説を重視

→在地社会では、村共同体による医者の雇用／遍歴する売薬商人・宗教者が補完

* 人々の病に対する姿勢／医術と呪術の共存

(2)外国の学問を取り入れる

18C 中以降、解剖実験の遂行／中国医学の信憑性を問いたす

*背景に、8代将軍徳川吉宗による漢訳洋書の輸入緩和以降、西洋学問の導入

→医学のほか、化学・物理学・軍事科学の知識が移入／近代科学の基盤が整備

*中国医学が不足していることを補う手段としての西洋医学／中国医学が完全に否定されたのではない

(3)流行病と闘う

パンデミックの影響／1822 文政コレラ・1858 安政コレラ／西洋医学導入の動機づけ

→医学の知識・技術に留まらず、検疫法など社会構造上の変化を促す／近代国家の医制を準備／たとえば、天然痘に対する牛痘法は予防という新しい考え方を広めた

→その一方で、近代では、公益に反する疾病・貧困・不潔などを排除する概念が入り込む

3. コメント

(1)災害・病の歴史を導入することの意味

人類の歴史に対する災害や病という非人為的動向の影響／ただし、人類の側にも災害・病の要因がある

*人類は自然と共存してきたか？自然を克服してきたか？

→もちろん、二者択一ではない／人類の側に何らかの要因があるとすれば、発展段階論の相対化を促す

*自然科学(サイエンス)の歴史は肯定的に評価される傾向／しかし、人類の生活を破壊する可能性も存在

→人類の存亡を脅かすほど科学技術を発達させてきた人類の歴史は、必ずしも人類の歴史は望ましい方向に向かっているとはいえないのではないか

(2)近世人の合理性

近世における西洋医学の導入／近代国家への準備を調える／西洋学問の正当化

→近代では、日本を含めた東洋思想を否定的に捉える傾向が進む／しかし、近世では東洋思想を基本としながら、その足りない部分を西洋思想によって補おうとした

*病に対する向き合い方／西洋医学がすべてではない／呪術を含めた複数の方法が共存

おわりに

災害・病は一部の属性の人々では完結しない

→非人為的動向への注視は、あらゆる属性を越えて取り組む必要性を喚起

*人類は人類同士で争っている場合か？

【テキスト】

牧原成征編『日本史の現在 4 近世』(山川出版社、2024 年)

【参考文献】

倉地克直『江戸の災害史—徳川日本の経験に学ぶ』(中公新書、2016 年)

鈴木則子『近世感染症の生活史 医療・情報・ジェンダー』(吉川弘文館、2022 年)

【付記】

・明日までに、Hoppiiie にて講義記録の提出を求める。

・小レポート提出期限 12 月 17 日：小レポートを提出した者が試験(2026 年 1 月 8 日)の受験資格を有する。